

編集者が見た 穴性論導入の歴史とこれから

山本 勝司

東洋学術出版社 会長

1. 穴性論の衝撃

中国針灸は日本針灸界に2つの大きな衝撃を与えました。

第1の衝撃——1970年代の針麻酔

第2の衝撃——1980年代の穴性論

穴性論は、針灸弁証論治、「理—法—方—穴—術」の核心です。

ツボに効能が付けられたことは、画期的でした。しかも、それは中医学理論とリンクした効能表記でした。

これまでの阿是穴療法や経絡派の伝統的な方式ではない、まったく新しい選穴方法が提供されました。

2. 穴性論は中医針灸の核心

『中医臨床』では、最初に『針灸経穴辞典』でツボの効能をうたいました。

兵頭先生といっしょに1984年ごろに「穴性とはなにか」という共通テーマをもって、上海、南京、天津、北京を取材訪問をしたのですが、天津で曹一鳴先生から『腧穴学』という学内教材を頂戴し、そこに系統的に示めされていた「腧穴の効能」をそのまま『針灸経穴辞典』に取り込ませてもらいました。

以降、『中医臨床』では一貫して穴性論を中心にした弁証論治の針を紹介してまいりました。

日本へ来たほとんどの老中医が穴性論を強調していましたし、大勢の留学生たちが中国で学んできたのも穴性論にもとづく針灸弁証論治でした。最後にたどり着いたのが「李世珍の針」でした。これは膨大な臨床経験を裏付けに築か

れた究極の穴性論といえます。ツボの効能を引き出すために、10分にも及ぶ手技を行うという極限の穴性論だったと思います。

3. 穴性は中医理論による効能表記

いま、この穴性論が薬性理論を踏襲したから、という理由で否定されていますが、私は薬性理論も四気五味だけでなく中医的効能を含んでおり、中医理論によって形成されたものだと考えます。穴性理論も薬性理論によってでなく、中医理論によって統括されたのだと考えます。

穴性理論の出現によって、ツボの効能が、最も簡潔な用語で高度に概括されました。それによりツボの運用の幅が拡大され、臨床面での指導性を大いに高めてくれました。

これまでのツボの概念を大きく変えるものであり、「世紀の大発明」へ踏み込んだものだと考えます。この試みは大切にしたいものです。中国史上に初めて出現し、近60年に蓄積されたこの経験と智恵を放棄してはならないと思います。

4. より実用性をもった効能表記に

いま、穴性否定論が出現したことによって、針灸の原点にもどってツボの効能をもう一度根底から洗い直すチャンスが訪れています。

現在通用している効能表記が最適であるのかどうか、様々な問題がありそうです。渡邊大祐さんが卒論で整頓してくれました。金子朝彦先生のグループも整理の作業を進めてくれています。効能表記をより適切なもの、臨床の実際により適応するものに発展させることが求められます。

ツボには固定的な効能は、本来的に存在しない、という論もあります。部位を中心とした主治表記だけでよい、という意見もあります。要穴と穴性の関係もあります。また、手技、刺激時間、深さ、配穴、患者の容態など条件によって効能が異なった表現をするわけですから、どういう条件があれば、どういう効能が生まれるのか、最適の基準を立ててゆかねばなりません。

5. 中医針灸学再構築のチャンス

穴性論の問題は、穴性問題だけに終わらず、針灸弁証論治の仕組み、中医学理論全体を含めた大きな問題につながっています。はたして、中医理論が針灸臨床の実際に適応できているのかどうか、臨床効果を発揮するうえで指導性が

あるのかどうか、検証すべき大きな問題に直面しています。

1) 趙吉平先生が、臓腑弁証が過剰であった、経絡弁証をもっと重視すべきだ、と反省をしています。

2) 周楣声先生が、最近号の『中医臨床』で、針灸の役割は症状を治せば十分なのであって、病気を直そうなどと過大な要求をもたないことだ、針灸は「通」によって症状を治すことで病気を治す条件を作っているのだ、と言っています。

これらは、針灸とは何か、針灸の弁証論治とは何か、をもういちど考えさせるテーマです。

日本は臨床において、中国ではできない、時間をかけた丁寧な治療をしています。また経絡治療という日本独特の治療方法ももっています。それらを総括して、日本なりの発言をしてゆく必要があると思います。